

『オオカミは恋を語る』

著：高月まつり

ill：こうじま奈月

井村銀工房の地図を見て、英司は「本当にうちから近い」と苦笑する。

彼が愛用している物静かなカフェの、一本向こうの通りだ。

いつも決まった道しか通らないので、これからは多少の冒険は必要だなと思いながら、彼は久しぶりに心浮かれた。

のんびりとここまで歩いて来たが、どうやらこの通りは、アーティストたちの工房や小さな画廊が多いようだ。元は民家や倉庫だった場所がそれらしく改装され、道行く人々の目を楽しませる。都内には、一步横道に逸(そ)れたり路地に入ると、意外とそういう店が多い。大体がクチコミで伝わり、訪れた人々は自分のお気に入りの店を見つけていく。

店がこじゃれていれば、通り過ぎていく若者たちも随分とお洒(しゃ)落(れ)だ。異性よりも同性の目を意識したお洒落に、英司は感心した。

「もしや、ここか？」

工房と言うよりは民家。そして、店の周りには地域猫がゴロゴロと寛(くつろ)ぎ、猫好きのカメラマンたちの被写体になっている。

それだけではない。

ぶっきらぼうというか味があるというか、作りかけの内装のような金属部分が剥(む)き出しの「作業中」のような店内には、十代から推定四十代までの男性たちがひしめき合っていた。

静かにカタログをチェックする者、既製品を吟(ぎん)味(み)する者、担当者らしき男性と受注品の確認をしている者。隅(すみ)っこで大人しく一列に並んで待っているのは、おそらく受注したくてここにやってきた者たちではないかと、英司は推測した。

佐藤から話は聞いていたが、予想以上の繁盛(はんせい)振りだ。

だが英司は、アクセサリーよりもまず、通りに面したショーウィンドーに釘付けになった。

あの、銀色に光る猫がいる。

彼らのモデルは、もしかしたら現在自分の足元にまとわりついている猫たちなのだろうか。

ありのままの姿がとてもいい。

「本当に全部……違う猫か。ヤバいな。揃(そろ)えたい……」

「え？ ホントに？」

いきなり横から話しかけられて、英司は柄にもなく驚いて声のした方を向く。

そこには、ひとなつこい笑顔を浮かべている一人の青年が立っていた。井村銀工房と書かれたエプロンをつけているのでスタッフだろう。少し釣り上がった大きな目と、おでこが丸見えの短い黒髪が、どこかやんちゃな子猫に見えて可愛い。遊んでやればどこまでも小さな爪を立てて食らいついてきそう。英司は猫が大好きなので、あれこれ想像して微笑む。

「……とてもいい置物だ」

「直(じか)に触ってみるか？ ……あー、違う。触ってみますか？ だ」

接客に慣れていないのか敬語がおかしい。だがそんなところも、英司は好ましく思った。

まさに、彼の大好きな「自由な猫」だ。

「是非」

そう言って、英司は青年の手を直に握り締める。

青年は一瞬目をまん丸にして沈黙したが、次の瞬間「あんた面白い」と言って歯を見せて笑った。

「お、面白い……？」

近寄りたいたいとか不思議な人だとかは言われたことはあるが、面白い人と言われたのは初めてだ。英司はますますこの青年に惹(ひ)かれた。

「他にもいろいろあるんだ。中に入って見てくれ。それとも……もしかして、アクセの受注に来た人？」

青年の顔は笑顔だったが、声の張りがさっきの十分の一まで落ちこんだ。

「いや。俺は、猫が欲しくて……」

ここにやってきたんだ、と言う前に、英司は青年に腕を掴(つか)まれて店内に引きずり込まれた。

「あのな、あのなっ！ 俺、動物が大好きなんだ。だから作るもんは身近な野生の、つまり野良猫が多い」

猫オブジェのコーナーが設けられている店内の一角で、青年は瞳を輝かせて英司に語る。

「俺も、猫は大好きだ」

「だろ？ 可愛いよなー。でさ、銀粘土で作ってるんだけど、俺は中に空洞を作るのがいやだから、文(ぶん)鎮(ちん)みたいに重くて……ほら」

青年が、英司の掌にオブジェを載せた。

たしかに、ずしりと重い。だがこれぐらい重い方が、安定感があっていい。それにしても、猫の表情が素晴らしかった。ふてぶてしいといふかなんといふか……。

英司の口元が思わずほころぶ。

「一万八千円」

青年が値段を言ってにっこり笑う。

「な、なかなか……いい値段だな」

「純銀粘土使ってるんだ」

「ほほう」

娯楽に大枚をはたくのは男のロマン。

英司は滅(めっ)多(た)なことではカードは使わない主義だが、今日は大盤振る舞いをしてしまいそうだ。

「他には？ 何匹か連れて帰りたい」

英司の言葉に、青年の目が輝いた。

と同時に、背後から「また押し売りかい？ 修(しゅ)生(う)」と声がかかる。

二人同時に振り返ると、そこには銀縁眼鏡(めがね)をかけた青年が困った顔で立っ

ていた。年は英司よりも少し上だろうか。しっとりとした口調から物静かな印象を受けた。

「押し売りじゃないって、亮(りょう)哉(や)さん。この人、俺の作った猫を買いたいって言ってくれた」

修生の言葉に、英司はコクコクと何度も頷く。

すると亮哉は、「へえ」と呟(つぶ)やき、じろじろと英司を見た。

「ここに来て、アクセサリーを注文せずにオブジェを買うとは、なかなか面白いね、君」
こっちは客なのに、その「君呼び」はないだろう、従業員さん。

密かに立場や順位にこだわっている英司は、心の中でこっそり突っ込み、「気に入りましたから」と正直に申告する。

「俺、今まで作った猫をこの人に見せたいんだ。な？ いいだろ？」

「頷(うなず)いてやりたいところだが……受注の受付が間に合わないんだ」

この亮哉という男は事務方らしい。

修生は「そっか。だったら仕方ねえよなー」と頷いた。

「では俺は、しばらく向かいのカフェに入っている。時間ができたら呼んでくれると嬉(うれ)しい。君の作った動物を……できることなら全部見たい」

英司は手の中のオブジェを名残(なごり)惜(お)しそうに飾り台に置き、修生を見つめる。

次の瞬間、修生はガッと、もの凄い勢いで英司の右手を両手で握り締めた。

「最低でも一時間はかかるんだけど……待っててくれるのか？」

「ああ。ぼんやりしながら暇(ひま)を潰(つぶ)すのは慣れてる」

「絶対に呼びに行く。迎えに行く。だから、待っててくれ。俺が今日、あんたみたいな人と出会えたのはきっと運命なんだ」

笑うと愛(あい)嬌(きょう)があって可愛いが、真顔になると生意気な目が際立つ。でもそれもまたいい。

英司は「そうか、運命か」と呟いて、修生の言葉に頷いた。

「修生、ほら。注目されすぎだ、お前」

亮哉は苦笑しながら修生の首根っこを掴み、受注デスクへと引っ張っていく。

一人で対応していた職人が「遊ぶんじゃない」と修生を叱(しか)った。

並んで待っていた客たちは「今のなんだ？」と首を傾(かし)げたが、自分たちの用事の方が大事なので騒ぎにはならなかった。

本文 p21～28 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>